

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00150

研究課題名（和文）日本の芸能「能」の演奏技法の伝承過程に関する歴史的研究 能管を中心に

研究課題名（英文）A Historical Study on the Transmission Process of Performance Techniques of the Japanese Performing Art "Noh": Focusing on the Noh flute

研究代表者

森田 都紀 (MORITA, Toki)

京都芸術大学・芸術学部・准教授

研究者番号：10572258

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、能という芸能で用いる「能管」という横笛の演奏技法の形成と伝承の歴史的過程を、現存する囃子伝書や手付（楽譜類）の所蔵調査・網羅的収集・丹念な分析と解読を通じて明らかにするものである。一噌流関連史料に加えて、他流儀の史料や影印翻刻されている史料等も活用して検証を進めた。その結果、室町後期から江戸初期の能は、いまだ演出が流動的で、能管の役者に任された自由な演出の部分が今より多かったことが具体的に明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の能楽研究において、囃子伝書や手付類（楽譜）を用いて演奏技法の具体相を紐解く演出研究は、必ずしも積極的になされてきたとは言えない。本来、演奏技法の解明なくしては、能のいきいきとした舞台を真に理解することは難しいにもかかわらず、能の演奏技法の歴史は充分には描かれてこなかったのが実状である。本研究は能管を軸に現在の能の演出が確立した伝承過程の一端を描出し、伝承の諸相をリアルに捉えようとする。それにより、従来の能楽研究の隙間を埋め、能の演出史の構築に一定の寄与を果たすと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the historical process of the formation and transmission of the playing technique of the Noh flute, called "Noh-kan" used in the Noh performing arts, through a survey of existing musical biographies and Tetsuke (sheet music) holdings, comprehensive collection, and careful analysis and deciphering. In addition to Issō school-related historical documents, we also utilized historical documents of other schools and reprinted historical documents. As a result, it became clear that the direction of Noh from the late Muromachi period to the early Edo period was still fluid, and that there was more freedom in the direction of Noh than now, which was left to the actors.

研究分野：日本音楽史

キーワード：能楽 能楽囃子 能管 演奏技法 演出史

1. 研究開始当初の背景

能は、奈良時代に中国大陸から伝来した技芸をもとに室町時代に大成し、江戸時代には洗練を極め、今日に至るまで600年以上の間伝承されている芸能である。演技をする役者と、四種類の囃子(能管・小鼓・大鼓・太鼓)とが一体となって舞台をつくりあげる歌舞伎劇であるが、囃子の果たす役目は大きく、舞台演出に欠かせない一要素となっている。なかでも能管は、物語の情景や登場人物の置かれた状況を抽象的に演出する重要な存在である。能管の演奏技法や演出は歴史的にどのように生成し、展開してきたのだろうか。

能の演出に関する研究は、所作や作り物などを中心に近年さかんにおこなわれるようになったが、能管に関しては先行研究が少なく、演奏技法や伝承については未解明な点が多い。そこで本研究では、能管の演奏技法の形成と伝承の歴史的過程を、現存する囃子伝書や手付類(楽譜)の所蔵調査・網羅的収集・丹念な分析と解読を通して明らかにしようとする。能管の手付類の解読においては、文献に記された表面上の事象を解釈するに留まらず、申請者自身の演奏実技経験を活かして、そこから立ち上がる音楽の実体を捉えていく。それにより、能管を軸に、現在の能の豊かな演出の確立した歴史的な伝承過程を描出しようとする。

能の演奏技法がどのような変容を遂げて現在の姿に至ったのかという問いは、能という一芸能の問題に留まるものではない。能が後世の歌舞伎や人形浄瑠璃などの成立に大きな影響を与えたことに鑑みれば、芸能史上の大きな課題でもある。また、能の演奏技法が定型化された単元に基づいて構築されていることから、同じように、定型化された単元をもとに表現される茶道や花道などの他の芸道にも共通する文化的基盤を捉えることにも繋がり、日本文化史上の大きな課題の一つとしても位置づけられる。

2. 研究の目的

本研究は、能管の演奏技法や演出が歴史的にどのように生成し、展開してきたのかについて、囃子伝書や手付類(楽譜)を用いて具体的に明らかにすることを目的とする。本来なら能の大成期以前も含めてその過程をみるのが理想であるが、能管の現存史料には制約があり、現段階では残念ながら室町時代後期以降の演奏技法しか検証できない。そのため、室町時代後期から昭和時代までに成立した囃子伝書や手付類(楽譜)を基とする。

これまで申請者が一噌流宗家の初世、二世、五世、八世の手になるそれぞれの手付類を解析したところ、能管の演奏技法は江戸時代中期までは変容していて、江戸時代中期までの流動性や多様性こそが現在の能の演出を創り上げる重要な要素になっていたと考えられた。とりわけ室町時代後期から江戸時代初期という時期は重要と考えられるため、本研究ではおもに江戸時代初期までに成立した史料を対象とする。公共機関で公開されている未翻刻史料や、すでに翻刻影印が公刊されている史料等も用いるとともに、能管関連の新出史料の発掘も適宜進める。そして、これらの囃子伝書と手付類(楽譜)の内容を照合した丹念な分析を行って、演奏技法が形成された道筋の一端を具体的に浮かび上がらせることを見ざし、能の演出史の見通しを立てる一助とする。

3. 研究の方法

おもな研究の方法は以下の二点である。

(1) 室町時代後期から江戸時代初期にかけて成立した囃子伝書や笛手付(楽譜)類の解読

囃子伝書と笛手付類を読み解いて両者の記述内容を総合的に解析し、室町時代後期から江戸初期における能管の演出を読み解いていった。扱った史料は多数ありすべてをここに書き記すことはできないが、以下におもなものを挙げる。笛手付類:『一噌流笛秘伝書』『一噌流笛唱歌付』『順勝院噌善手記』等(以上、早稲田大学演劇博物館蔵)、『聞書並笛集付唱歌』(大蔵弥太郎編『大蔵家伝之書 古本能狂言』第五巻所収)、『番笛集』『千野流笛唱歌』等の由良家史料(以上、萩市博物館)、『平政香笛唱歌付』(法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵)、『囃之事』(『金春古伝書集成』所収) 囃子伝書類:『矢野一宇聞書』(早稲田大学図書館蔵、伊地知鐵男編『中世文学資料と論考』所収)、『笛の事』(法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵)、『笛ノ本』(広島大蔵、『宮増伝書・異本童舞抄』所収)、『三ヶの書』等の由良家史料(萩市博物館蔵) 謡伝書:『宗筠袖下』(『金春古伝書集成』所収) ほか。できるだけ能の演出史全般との関わりにも目を配り、能管の演奏技法の歴史的な形成を横断的に捉え、その具体像に迫ろうとした。必要に応じて専門能楽師の協力を仰ぎ、現行伝承との比較も適宜行いながら、様々な解釈の可能性を追求した。

(2) 史料調査・収集

上記と併行して、能管の手付類(楽譜)の史料調査と収集を進めた。早稲田大学演劇博物館、早稲田大学図書館、法政大学能楽研究所などの公共機関のほか、一噌家などの能楽笛方有力家にも調査を依頼し、適宜閲覧の許可を得た。重要な史料は、了解が得られれば、デジタルカメラでの撮影ないし紙焼写真の複写等を行った。史料の所蔵、著者、編者、成立年代、系統、書写年代、装丁、寸法等の書誌はデータベース化した。いずれも継続調査が必要である。

4. 研究成果

上記のように、室町時代後期から江戸時代初期に成立した囃子伝書や笛手付類を読み解いていったところ、現行とは大きくことなる点が多々見受けられた。そこで、「音取」という能管の曲目に着目して分析を進めることとした。現行では「音取」は能管の習い事として〔音取置鼓〕という囃子事や 恋之音取 などの能の小書(特殊演出)で吹かれるが、室町時代後期から江戸初期の「音取」の在り方が今と大きく異なっていたことを、おもに旋律の特徴に焦点を当てて具体的に検証した。以下に詳細を記す。

当時の笛伝書や笛手付類をみると、まず、笛役者にとって「音取」は広く拍子不合のアシライの旋律を意味したことが認められた。旋律構造のうえでは「ユリ」の旋律と深い関わりがあり、「ユリ」を含む長いアシライ全般を「音取」と呼んでいた可能性がある。また、「音取」は能の様々な場で吹かれていたことも確認された。その一つに謡事があり、現行の謡のアシライに近いものとして謡を囃す際に用いられていた。例えば「音取」は〔クリ〕の小段で吹かれ、「ユリ」を謡の本ユリの節と併奏していたのが認められた。この形は現行の〔クリ〕で吹かれる笛のアシライにも受け継がれている。さらに「音取」は、働事や出端事などでも吹かれたことが判った。シテの不定型な所作に即興で応じたり、シテや囃子方と自由な掛け合いをしたりする際に用いられていた。こうした見計らいによる自由な演出において観客を満足させ、能管の聞かせどころとなり得たのが「音取」であったともいえ、「音取」は、演出が定まる前の流動的な能において今以上に欠かせなかったと考えられる。『一噌流笛秘伝書』(早稲田大学演劇博物館蔵)に「音取」の心として「フタイヨサマスマシキト云」とみえるように、「音取」には舞台をつないでより面白いものにする働きがあったといえよう。笛役者が演出を計算してふさわしい「音取」をある程

度自由に選んでいたことも認められ、「音取」は汎用的なアシライとしても用いられていた。こうしたなかから、面白くて好ましいものが人々の記憶に残り、再演されるなかで定型の旋律となって固定化し、あるいは小書（特殊演出）として特別に洗練される方向に展開していったことが推測される。

以上の検証を通じて窺えるのは、当時の能が流動的で役者に任された自由な演出の部分が今よりも多かったことである。その後、江戸時代を通じて、「音取」は現行のような習い事として狭い範囲で用いられるようになったと推測されるが、その過程については今後、継続して調査を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森田都紀
2. 発表標題 室町後期から江戸初期における笛の「音取」 旋律の特徴を中心に
3. 学会等名 能楽学会 第104回東京例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田都紀
2. 発表標題 能で吹かれる能管の伝承研究
3. 学会等名 文明哲学研究所 第11回芸術研究の世界（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------